

学校経営目標	重点目標と評価				(中間評価)				(最終評価)				個別評価		総合評価		評価基準						
	(1)西大寺の生徒に身に付けさせたい6つの力 ○課題発見力 ○自己調整力 ○協力する力 ○発信力 ○課題解決力 ○自律的活動力																						
	(2)具体的な取組 ①「健康」(心育:マインド)… 心身の健全な成長、及び品格や思いやりの心の育成 ・主体性を育む生徒会活動や部活動等の特別活動の充実 ・気付きシートや心の健康観察アプリの効果的な活用を含めた教育相談の充実 ②「知性」(学力向上:スキル)… 主体的・対話的で深い学びの実現、及びPBLの推進 ・わかる授業の実践(ICT活用、個別最適な学び、協働的な学び、リフレクション) ・指導と評価の一体化による授業改善 ③「自律」(地域連携:アクション)… 自己の視野と可能性の拡大、及び実践力と挑戦力の育成 ・校内外におけるチャレンジの促進(資格取得、部活動、各種コンテスト等への参加) ・地域資源を積極的に活用した、CCT、キャリア教育、社会貢献活動、国際交流等の充実 ・進路実現にもつながるCCT、キャリア教育、社会貢献活動の在り方や体系化の検討 ④「チーム西高」としての協働 ・情報共有と報道相を徹底し、協働による学校課題の解決を目指す教職員集団づくりの推進 ・働き方改革の推進、及び同僚性を大切にしたい支え合う雰囲気づくりの推進								①・自分で考えて行動している生徒が多くいると感じた。 ・生徒に話しかけると誰でもきちんと応答ができていた。 ・男子生徒のシャツ出しなど、生徒の服装が気になる。 ②・授業での教員との距離が近く、素直に聞ける雰囲気がある。 ・個別の面接や小論文の指導などがよくなっている。 ③・地域の人をもっと活用すべき。 ・CCTの最終発表は他学年も見られるようにすべき。 ・CCTについて、1年生のうちに自分が必要にすることについて、動機付けされるような機会をつくって欲しい。 ・地域貢献活動やボランティア活動を学校内の教育活動に繋げられるような計画を進めるべき。				①・教育相談室の「1人も取り残さない」という発想のもと、相談ツールの活用を強めて欲しい。 ・アンケート結果を量的調査ではなく、質的調査を用いて結果を活かすことが必要ではないか。 ・校内美化が進んでいる。さらなる取り組みの意義を、自覚させられるよう、生徒主体の取組に期待する。 ②・個々にあわせた指導を考慮して欲しい。 ・推薦指導への対応は十分なものがあがるが、生徒間の不公平感に配慮して欲しい。 ・CCTで育てた力が生きているような授業展開を推進して、その力を授業で活かすものにして欲しい。 ・進路指導は充実しているが、進路指導課と学力向上委員会の連携が必要である。 ・なぜベアワークやグループ学習、振り返りが必要なのか、その場で実感させることが大切。 ③・探究学習の最終的な成果が分かる資料の提示をお願いしたい。 ・韓国とのオンライン交流は、母国語ではない英語の交流により、国際感覚を身に付けるのに役立つ。 ・学校と関わりのない活動や体験を活かせる構えを作っておくことが進路指導課の課題となる。 ・授業や発表会の姿から生徒、教員共に前向きな姿勢を感じた。保護者への発信に期待したい。 ・課題研究に「起業、創業」に関する分野を取り入れて欲しい。 ・海外の大学進学や長期留学への支援も充実させて欲しい。 ④・学校自己目標アンケートの「生徒に関する情報について、教職員で日常的に話し合っている」について、よく当てはまる(77%)やあてはまる(23%)が昨年度よりおきく伸びている。 ・一方、「気軽に相談しあえる」「情報の共有」については、否定的な回答が増えている。				B		B		A		B
該当する経営目標の番号	部・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中 間 期				最 終 期				学校関係者評価										
					達成状況		個別評価	総合評価	達成状況		個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切性							
(1)	学力向上委員会	・主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、PBL(課題解決型学習)を推進する。 ・わかる授業の実践を目指す。教員が相互に学び合う環境を整備する。 ・指導と評価の一体化による授業改善を図る。	・「ICT活用・個別最適な学び・協働的な学び・リフレクション」等、教員自身が各自設定したテーマで相互授業参観を実施する。 ・クロムブックによる振り返りシートの配信等、ICTを活用した実践事例を共有し、実践を促す。 ・6月と11月の授業公開強化月間に公開授業や相互授業参観が活発に行われるよう、OJT研修を活用する。 ・「西高授業スタンダード5ヶ条」を周知徹底する。	・授業評価アンケート「授業中に主体的に学習し、自ら課題や新たな問いを発見できている。」の項目に対する肯定的回答が平均値で60%以上。 (R5:第1回 国数英平均49%、地歴理科商業平均50%、実技系59%) ・学校自己評価アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすい。」の項目に対する生徒の肯定的評価が90%以上。 (R5:第2回調査 84%)	・授業評価アンケートは各教科に実施を依頼している。 ・学校自己評価アンケート「先生は、ICT活用したり、振り返りシートを活用するなど授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすい。」の項目について肯定的回答は91%、昨年度とは質問文を改訂したが、「よくあてはまる」の肯定的回答が25%から43%へと大きく増加している。	B	A	・授業評価アンケート「授業中に主体的に学習し、自ら課題や新たな問いを発見できている。」の項目に対する肯定的回答が平均値で第1回51%、第2回54%(1、2年のみ)。 ・学校自己評価アンケート「ICT活用したり振り返りシートを活用するなど授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすい。」の項目に対する生徒の肯定的評価が91%。	C	B	・授業評価アンケートの意義の説明や実施への呼びかけが不十分であり、授業評価アンケート未実施の科目がある。 ・学校自己評価アンケートは質問項目が昨年度よりも具体的になったこともあり、高評価となった。ICT活用をテーマとしたOJT研修には経年研談当以外の教員も参加している。	・授業評価や学校評価アンケートを実施することがなぜ授業改善や学力向上に資するのかについて、各教員が考える場を設ける。 ・PBLを推進するために、(アンケートや職員会後援の研修等)経年研や相互授業参観等を通して気軽に授業改善を語り合えるようにする。	B	B									
	CCT・地域連携室	・各学年・科・課・教科・地域等との連携を深め、6つの力の育成を目指した系統的なCCT・社会貢献活動の仕組みをつくる。	①【外的アプローチ:場の提供】 地域資源を積極的に活用し生徒が様々な価値観や考えに触れることができる機会を提供する。 【インプット】 CCTでの活動や社会貢献活動等で得た学びを自分の進路(生き方・在り方)と照らし合わせながら自分の言葉で他者に伝える機会をつくる。 【アウトプット】 ②【内的アプローチ:自分事への変換】 6つの力がどのように身についたかをルーブリックを用いて振り返り、経験や学びから得たことを次の行動へとつなげていく仕組みをつくる。	・学校自己評価アンケートにおいて 【1年生】 「総合的な探究の時間」や社会貢献活動等の取り組みを通して自ら課題を見つけそれについて考え学ぶほうとしていく力が身についた。」が90%を超えている。 【2年生】 「総合的な探究の時間」や社会貢献活動等の学校行事における取り組みを通して見つけた課題を解決するために地域や外部とのつながりの中で自ら行動をおこし学びを得ることができた。」が60%を超えている。 【3年生】 「総合的な探究の時間」や社会貢献活動等の取り組みを通して得た学びや気づきを自分の生き方・在り方と照らし合わせ、卒業後の進路実現に向けて自ら行動をおこし努力することができた。」が80%を超えている。	・社会貢献活動等の機会提供や意義についてはほぼ全員が認知してくれている一方で、学校自己評価アンケートの「探究する活動に積極的に参加している」についての生徒の肯定的回答は、1年生89.2%、2年生85.9%、3年生91.8%であり、教員92%、保護者85%であった。 <今後の対策> 1年生や2年生については、まだ本格的な探究活動がスタートしていない時期でのアンケート実施であったため、今後の取組を丁寧に進めていきたい。保護者に対してはホームページやSNS広報「X」などで積極的に活動を発信し今取り組んでいることをまずは知ってもらおう工夫をしていきたい。	B	B	・「社会貢献活動、ボランティア活動の機会を多く設けている」項目の指数が前回と比べて生徒に開いてトツプにきている。また、保護者に関しては割合が29%⇒35%と上昇。教職員も変化なし。 ・自分たちは探究する活動に積極的に取り組んでいる」と回答した生徒の割合は1・2年生で前回に比べてよくあてはまる」と回答した割合が激減(1年生:46.4%⇒43.6%、2年生:52.0%⇒50.6%)3年生は43.0%⇒44.0%と上昇。 ・「探究する活動を通して学習機会を提供している」と回答した教職員の割合が前回に比べて36%⇒53%と上昇。また、保護者の認知度も23%⇒29%と微増。	B	B	・「社会貢献活動については、毎月の「さいさいこども食堂」や西大寺百花プラザでの清掃ボランティア等積極的に生徒へ呼びかけられた結果、参加者も認知度も上昇した。 ・CCTをはじめとする探究活動については、1・2年生で微減した理由としては、「探究」について難しくとらえず自己評価が低くでている可能性が考えられる。その反面教職員側の数値が上昇したことについては先生方「探究活動」への関心の高まりだと考えられる。	・今後も引き続き、生徒に向けて情報を流して積極的に社会貢献活動への参加を促していく。 ・「探究」のプロセスについてもっとわかりやすく取り組めるよう、活動内容を工夫していきたい。また、外部のフォーラムやワークショップなどへの参加を増やすために、CCT関連の情報流すためのクラスルームを各学年で作成し、流していく。 ・CCTの指導力向上のために、教職員向け研修会やミーティングを各学期1回設定し、探究の悩み等、情報共有を行う。	A	B									
(2)	総務課	①各科・課・教科等との連携を深め、小中学校に向けた戦略的広報活動の充実を図る。 ②国際交流関連行事を通して生徒の国際感覚とコミュニケーション能力を育む。	①オープンスクール、学校説明会・SNSを通して中学校の先生方や中学生・保護者に本校の教育活動について正しく理解してもらえるよう工夫を行う。 ②地域の人的資源の活用などによって国際交流行事を充実させ、生徒が多様な価値観や考えに触れることができる機会を提供する。	①実施後のアンケートにおいて「本校の教育活動についてよく理解できた」が70%を超えている。 ②各行事の実施後のアンケートにおいて「英語でのコミュニケーション能力が高まった」が70%を超えている。 (R5:69.0%、R4:79.4%、R3:62.2%、R2:未実施)	①実施後のアンケートにおいて「本校の教育活動についてよく理解できた」は70.2%であった。 10月には中学生と保護者対象の学校説明会に向けて計画を進めている。 SNS広報「X」を週1回以上更新し、行事や学校外での活動などについて随時発信している。 ②2年生国際情報科の生徒と、学校法人せとう日本ITビジネスカレッジの留学生5名との交流会を7月に実施した。岡山県県民生活部国際課から交流員を招き、1・2年生対象の異文化理解講座を7月に実施した。	B	B	①・各行事実施後のアンケートにおいて「本校の教育活動についてよく理解できた」は最終的に75.3%であった。 ・10月には中学校教員対象の説明会を実施し、29名の参加があった。 ・SNS広報「X」やYouTube上の学校紹介動画を広報活動で活用し、フォロワー数・再生回数ともに伸びている。 ②・実施後のアンケートにおいて「英語でのコミュニケーション能力が高まった」は74.2%であった。 ・初の試みとして、韓国の高校生とのオンライン交流会を12月に実施し、2年生普通科8名、国際情報科9が参加した。	B	A	①・オープンスクールでの3クールから2クールへの変更による時間配分の改善、学校説明会での在校生参加型への移行等により、学校の雰囲気や生徒の活動をより生き生きと伝えることができた。 ・定期的にSNS広報「X」を更新することでフォロワーの関心を引き、学校の認知度や関心度が高まっていると考えられる。 ②・国際情報科のイングリッシュキャンプでは生徒のほぼ全員が英語力(コミュニケーション能力を含む)が伸びたと回答。 ・韓国の高校生とのオンライン交流会では国際情報科の生徒が中心となって進めた。 ・普通科の生徒とお互いに意見交換もでき、参加生徒の満足度も高かった。	①・参加者のアンケートのフィードバックを元に、具体的な改善点を洗い出し、来年度の企画に戦略的に反映する。 ・SNS広報を活用した事前・事後の情報発信を強化し、動画配信等を増やしていくことで、学校への関心をさらに高める。 ②・既存の国際交流行事のプログラム内容を見直し、生徒がより積極的に参加できるようにする。英語科だけでなく他教科との連携も強化する。 ・韓国とのオンライン交流は来年度も継続予定である。具体的なテーマ設定や、学年や学科を超えた多様な参加者の募集等を検討していく。	A	B									
	教務課	①新学習指導要領の実施に伴う内規の追加・修正等の整備を完成する。 ②各課と連携し、学習活動に関わる情報や行事予定を保護者に適切な時期に分かりやすく発信する。 ③業務の効率化を行うことで教職員の業務負担の軽減を図り、進路指導や学習指導等の時間を確保できるようにする。	①新教育課程への完全移行に伴い評価方法を整理するとともに、内規の修正、教科書選定等の関連業務を正しく行う。 ②「通知表の見方」や「シャボテンアプリ」の活用についてや、行事予定等の情報を保護者に適切に時期に分かりやすく提供する。関係する課と連携し百問難問やGoogleworkspace等の様々な機能や活用を教員に周知し、活用を推進することで、生徒や保護者に情報を提供する。 ③成績処理や出欠統計、指導要録作成等の業務を効率よく行う方法を係長会議や教務課会議で検討し、実施していく。	①新教育課程の実施に伴い必要な追加・修正等が、R6年度中に完成する。 ②学校自己評価アンケートの「教育方針や目標を生徒や保護者に分かりやすく情報提供している」の肯定的回答が80%以上となる。 (R5: 生徒78%、保護者77%) ③業務改善の実施後に教職員にアンケートを行い、肯定的回答が80%を超えている。	①新教育課程の実施に伴う内規の改正を行っているところである。 ②学校自己評価アンケートの「教育方針や目標を生徒や保護者に分かりやすく情報提供している」の肯定的回答が89%、保護者85%となっている。これまで保護者の方に向けて時期を過ぎず情報提供を行う、図書課の情報係の協力によるメール登録者数の増加への取組、保護者懇談でのグラッドデザインや学校新聞等の掲示、楽メールでの情報提供等に取り組んできた。 今後保護者の方へ時期を過ぎず、適切に情報提供できるように取り組みたい。 ③成績処理や出欠統計等の業務について7月から運用方法を変更し、教員の業務の負担軽減、業務の効率化を進めることができた。今後教職員にアンケートを実施し検証したい。	B	A	①新教育課程の完全移行に伴う内規の改正が完了した。 ②学校自己評価アンケートの「教育方針や目標を生徒や保護者に分かりやすく情報提供している」の肯定的回答が生徒88%、保護者87%となり、昨年より約10%増加し目標を上回ることができた。 ③成績処理や出欠統計等の運用方法の変更に伴う業務改善について教職員にアンケートを行った。95%の肯定的回答を得た。	B	A	①新教育課程がスタートしてから実際に運用していく中で、順次整理してきたものを完成することができた。 ②今年度は図書課視察・情報管理係と連携し、楽メールへの登録を夏季休暇も利用しながら継続的に行った。多くの保護者の方に登録を頂き、中間期以降も実施した毎月の楽メールでの情報発信により学校の取組を知ってもらえたのではないかと考えている。 ③「あまり思わない」の回答は5%だったがこれはこれまでと同様の運用を行ったことやネットワークシステムが原因での回答であったことから、ほぼ100%の教職員に業務改善を実感してもらえることができた。R4より始まった観点別評価の導入により成績処理業務が増加しているため、運用方法の変更を実施したことによる業務負担軽減が実感されていると考えられる。	・新教育課程に完全移行し3年が経過し、現状を各学科・各教科で検証をおこなった。これまで不透明であった入試情報に対応しながら教育課程の変更を加えてきたが今後学校経営目標やグラッドデザインに基づき魅力ある学校の実現に向け、教育課程の変更の必要性を教育課程検討委員会と協議を進める。 ・学習指導、進路指導、部活動の指導など業務は多岐にわたる。教務課内で改善案を検討し、教職員が生徒一人ひとりと向き合える時間が確保できるよう校務のDX化を進めるなど今後でもできることから業務負担軽減に取り組んでいく。	A	B									
	生徒課	・学校内外での諸活動を通じて、生徒が豊かな人間性を醸成し、社会の変化に対応できる資質を身につけるための支援を行う。	1.生徒会活動などの特別活動や部活動に、本校の定めた活動目標や方針に基づきながら主体的に取り組ませ、心身の健全な成長を促す。 2.TPOに応じた態度の醸成を通じて、公共心に富んだ社会人としての自立に必要な状況把握能力などを向上させる。 3.論理的な対話により、交通法規も含めたコンプライアンスの意識を高めさせる。	1.諸活動による心身の健全な成長 学校自己評価アンケートにおける質問「文武両道を目指した生活を送ることができ」の項目について肯定的回答85%以上となる (R5: 84%) 2.公共心に富んだ社会人 学校自己評価アンケートにおける質問「社会人としてのマナーやルールを学習する機会がある」の項目について肯定的回答が85%以上となる。 (R5: 80%) 3. 交通法規とコンプライアンスの意識 学校自己評価アンケートにおける質問「先生はいじめや生活指導上の問題を見逃さずに対応している」の項目について肯定的回答が90%と高く、担任を中心に全教員が1人1人の生徒をきま細やかに観察している。継続していきいた。 交通マナーや電車内マナーについて、外部からの苦情が数件あり、継続して指導している。	1.学校自己評価アンケートの「学習活動と学校行事や部活動等を両立する高校生活を送っている」と質問文を改訂したが肯定的回答は85%であり、学習と部活動等をバランスよく高校生活送っている。引き続き、生徒が主体的に活動する場面を設けて、自立を促し、学習にも良い影響を与えたい。 2.学校自己評価アンケートの「社会人としてのマナーやルールを学習する機会がある」の項目について肯定的回答が97%と高い結果となった。 3.学校自己評価アンケートの「先生はいじめや生活指導上の問題を見逃さずに対応している」の項目について肯定的回答が93%と高い結果となった。交通マナーや電車マナーについての苦情も、11月以降はなくなった。	B	B	1.新型コロナウィルスによる活動制限がなく、生徒も規制なく従来の活動ができたことが、要因と考える。また、教師・部活動顧問もそれに促して活動をしたこともアンケート結果に反映されていると考える。 2.ホームルーム活動、学校行事、学年集会など、指導する機会をつくりつけたことが生徒への理解や行動に繋がったと考える。 3.シャボテンログ、学校生活アンケート、担任による生徒面談、ハイパーQなど、生徒の様子を日ごろから観察できる体制が、生徒の安心感を生んでいると考える。 校外での苦情については、全体への注意喚起のみに完結している。	・生徒会活動および委員会活動において、今年度より1つでも増やし、「西大寺フリー塾(仮称)」などような生徒が主体的に活動できる環境を整えれば、生徒の自立や自己肯定感を更に上げる。と考える。 2.全校集会・学年集会や学校行事などの機会を捉えて、生徒会が中心となり、生徒へ社会人としてのマナーおよびTPOを伝える。肯定的回答が高いため、次年度のアンケート内容の変更も考える。 3.交通マナーの苦情については、教員および生徒会の両端で注意したい。生活アンケート結果をより有効にするために、クロームブックによる回答も考える。	B	B												

経営目標 の番号	課・学科 学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中 間 期		最 終 期						学校関係者評価			
					達成状況		個別 評価	総合 評価	達成状況		個別 評価	総合 評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥 当性	改善方策の 適切さ
(2)	進路指導課	●『進路便り』等の広報紙、集会、CCTを通して、進路選択に関する基本知識や、多様な入試制度や変更点等タイムリーな情報提供を行うとともに、早期からの進路意識の高揚を図る。 ●受験に対応できる確かな学力を定着せ、国公立大合格者を増加させる。 ●学習活動を中心とした生活習慣の早期確立を図り、就職試験に対応できる学力の定着を図る。	ア 進路情報の効果的な提供 他課室や教科と連携して、学年集会、CCT、LHR、また面接や懇談を通してタイムリーな情報提供を行い、生徒が希望する進路の実現を可能にする。進学や就職に対する幅広い視野や将来に対する展望を持たせ、早期からの進路意識の高揚を図るため、『進路便り』を各学年年間10回を目標に発行する。 イ 教科指導力の充実 授業見学、研修、生徒からのアンケートなどを通じて、授業での指導力の充実をはかる。 ウ 家庭学習習慣を確立させる指導 予習、授業、復習のサイクルを確立させる。1日平均180分(1.2年)の家庭学習時間の確保を目指す。 エ 個人指導の徹底 成績上位者の伸長、不振者への指導など、生徒個人に応じたきめ細かい指導にあたる。担任による個人面接において、学習方法の指導を充実させる。学年団教員と協力して、面接・小論文指導などを行う。より高い進路実現に向けて、粘り強く最後まであきらめずに学習に取り組ませる指導を徹底する。 オ 補習・土曜講座の運営 補習、土曜講座を通して、授業の補正と内容理解の深化を図る。 カ 総合的な探求の時間(CCT)・LHRを利用した3年間を見通した指導体制の確立教員間の意思統一の基に、学年、学期ごとの長期、短期的な目標を設定し、実行、検証する。 キ 保護者との連携 進学説明会、保護者懇談会などを通して、学習や学力の実態や就職状況、入試制度を周知徹底する。	●学校自己評価アンケートの「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目に対する肯定的回答が92%以上になっている。 (R5: 平均 生徒91%) ●3科合わせて国公立大現役合格者数が44名以上になっている。 (現状 2年1月進研模試偏差値52～54(普通) 2年1月実力診断B1以上(商業) が国公立大合格者の目安であり、現3年生は43名程度と予想される) ●民間企業への就職希望者が100%就職できている。 (R5: 100%)	●学校自己評価アンケートの「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目に対する生徒の肯定的回答は97%であった。中四国の国公立大学のOCや体験講座について、担任が語れるように大学や学部の説明をつけた。また、7月に国公立大オンラインガイダンスを実施し、多くの生徒が参加した。「受験レポート」を各自で見せるために、マナビジョンの登録・確認も行った。その他にも、「進路講演会」「学年集会等」での講話などを実施した。これらの取組を通して、高い数値を出すことができた。 ●国公立大合格者は未判明だが、国公立大の総合型・学校推薦型についての説明を、従来は担任のみが行っていたが、今年度は進路課長より3年全クラスに行った上で、再度担任から確認した。また、国公立大の学校推薦選考会議を9月下旬から初旬に早めたため、学校推薦の選考に漏れても総合型に出願できる仕組みを整えた。仕組み作りだけでなく、肝心なのは生徒への指導であるが、学年主任と連携しながら、教員の割振りをし、分担し指導にあたっている。 ●就職希望者は現在4名で、応募前職場見学・履歴書の指導をし、中旬から始まる面接に向けての準備を行っている。	A B B	●学校自己評価アンケートの「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目に対する生徒の肯定的回答は97%であった。中四国の国公立大学のOCや体験講座について、担任が語れるように大学や学部の説明をつけた。また、7月に国公立大オンラインガイダンスを実施し、多くの生徒が参加した。「受験レポート」を各自で見せるために、マナビジョンの登録・確認も行った。その他にも、「進路講演会」「学年集会等」での講話などを実施した。これらの取組を通して、高い数値を出すことができた。 ●国公立大合格者は未判明だが、国公立大の総合型・学校推薦型についての説明を、従来は担任のみが行っていたが、今年度は進路課長より3年全クラスに行った上で、再度担任から確認した。また、国公立大の学校推薦選考会議を9月下旬から初旬に早めたため、学校推薦の選考に漏れても総合型に出願できる仕組みを整えた。仕組み作りだけでなく、肝心なのは生徒への指導であるが、学年主任と連携しながら、教員の割振りをし、分担し指導にあたっている。 ●就職希望者は現在4名で、応募前職場見学・履歴書の指導をし、中旬から始まる面接に向けての準備を行っている。	A B B	●進路情報の提供を続け、特に3年には出願の注意や心構えを詳細に伝えてきた。進路便りを現在全学年累計27部発行している。推薦等入試に関して生徒へ進路課長から説明し、保護者へも推薦説明会を実施し、両者に適切な情報を伝えることができた。なお、アンケートは12月進路説明会(1.2年対象)前に取ったため、アンケートを再実施すれば、さらなる数値の上昇もありえることを申し添えておきたい。 ●国公立大現役合格者のカギを握る「総合型Ⅰ」「学校推薦型Ⅰ」で過去最も多い合格者を出すことができた。国公立大に多く出願させ、担当を割り振り個別指導をしっかりと行った結果である。今年度は学年を超えて学校全体で指導にあたっていただいた。 ●進路指導課(就職指導係)が、3年団と連携し、個に応じた指導ができた成果である。	●3年へは、出願指導研究会を踏まえた進路検討会や学年連絡を通してさらなる進路情報の提供に努めたい。1、2年についても、引き続き進路通信を発行し、今後も情報提供をしていきたい。 また、終業式後の進路講話などで、情報を伝えつつ、生徒に刺激を与える。 ●国公立大学総合Ⅱ・学推Ⅱの出願(予定)者も多く、一般も含めさらなる合格者増加に向けて指導していく。 ●今後進学から就職に変更する生徒が出てくれば、3年団と連携して指導にあたる。	A B					
	厚生課	・校内美化に力を入れ、教育環境の整備に努める。 ・生徒の心身の健全な成長を支援する。	・整美委員会による清掃状況チェックをさらに活発化し、校内各所の清掃を徹底する。 (チェック方法や回数の見直し) ・教員間の情報共有の徹底と研修会実施により、体調不良者への対応を適切に行うことができるようにする。(研修会:救命救急とAED研修会、食物アレルギーとエビベン研修会 等) また、保健委員会を通して生徒への健康啓発活動を行う。 (熱中症予防、運動時のけが予防 等)	・学校自己評価アンケートで「校内美化が図られ、落ち着いた教室環境が整っている」の項目に対する教員と生徒の肯定的回答が上昇する。 (R5: 生徒67%, 教員88%) ・学校自己評価アンケートで「怪我や体調不良の場合に適切に対応してくれる」の項目に対する生徒と保護者の肯定的回答が90%を維持する。 (R5: 生徒93%, 保護者94%)	・昨年の反省を生かし、清掃チェックの頻度を上げた。また先生方の協力もあり、学校自己評価アンケートで「校内美化が図られ、落ち着いた教室環境が整っている」の項目に対する教員の肯定的回答は教員90%、生徒91%であり、改善している。ただ、まだ清掃が行き届いていない箇所は見られる。 ・各種研修が計画通り行われている。また、昨年を上回る酷暑であり、熱中症・けが予防のためのトレーニング講習会を開催し、また、熱中症警報発令時には校内放送で注意を呼び掛けた。学校自己評価アンケートで「怪我や体調不良の場合に適切に対応してくれる」の項目に対する肯定的回答生徒97%、保護者94%。	B A B	・「校内美化が図られ、落ち着いた教室環境が整っている」の肯定的回答生徒89%、教員89%前年より特に生徒が改善した。 ・怪我や体調不良の場合に適切に対応してくれる」の肯定的回答生徒97%、保護者94% 高水準を維持できている。	B A B	・整美委員会による清掃チェックの取り組み等により、前年度よりは特に生徒の感想が上昇したが、2学期秋桜祭後の清掃不徹底があったように見える。保護者の記述回答には清掃不徹底を指摘するものもあった。 ・保健室をはじめ、各担任団も生徒の病気やけがに誠実に対応できている。感染症の拡大に伴い保健委員会からの呼びかけ経年劣化してきた加湿器のフィルタ一交換なども行った。	・清掃に関しては、委員会活動など生徒主体で自分たちの学習環境を整える意識をもって取り組めるのが一番であるが、現実的には各担当教員の意識や力量に負うものが大きい。教員へのさらなる清掃意識向上となる取り組みが必要。(委員会による清掃点検結果の一覧公開など)	B B					
	図書課	・図書館を活用した探究活動の充実を図り、読書に親しむ態度を育てる。 ・視聴覚・情報処理関連機器の活用頻度を向上させる。 ・スタンバイ・シャボテンログの円滑な運用に資する。	・図書委員会活動の充実と授業での図書館利用を促進し、読書への関心を深めさせる。 ・コラムリーディングの充実・徹底を図り、時事問題への興味・関心を喚起する。 ・継続した保守により利便性を向上させるとともに、活用の研修会を開催する。 ・スタンバイへの投稿内容やシャボテンログへの相談依頼について生徒課・教育相談室と生徒の動きを共有する。	・授業・CCT・LHRでの図書館利用時間数が1年で150時間以上、貸出冊数が5,500冊を超える。 (R5: 313時間5185冊) ・3冊以上借りる生徒数が60%を超える。 (R5: 57%) ・ChromebookをはじめとするICT機器メンテナンスの最新情報提供を年に3回以上行う。 ・学校自己評価アンケートの「先生ははじめや暴力などの生活指導上の問題を見逃さずに対応」の項目に対する肯定的回答が92%を超えている。 (R5: 91%)	・8月末現在、授業・CCT・LHRで図書館利用時間数106時間、貸出冊数3,094冊、3冊以上借りる生徒数全体の35.7%。これらの数値は昨年同時期をそれぞれ852冊・5.7ポイント微増。達成目標に向けて順調に数値を伸ばしている。 ・ChromebookをはじめとするICT機器メンテナンスの最新情報提供3回。既に目標の最低ラインは達成している。 ・学校自己評価アンケートの「はじめや暴力などへの対応」に対する生徒の肯定的評価は中間期で93%、昨年度末の91%を上回り、達成目標値もクリアしている。5月に実施した篠原薫先生の講演会のインパクトが大きかったと考えられる。	B A A	・12月末現在 授業・CCT・LHRでの図書館利用時間数 289時間、貸出冊数5470冊(内教員538冊)・3冊以上借りる生徒数全体の54.7%。 ・ChromebookをはじめとするICT機器メンテナンスの最新情報提供5回。 ・学校自己評価アンケートの「はじめや暴力などへの対応」に対する生徒の肯定的評価(最終)は92%	B A A	・CCTなどの探究活動で、ネット上の情報を鵜呑みにせず、書籍化された情報を積極的に参考にするように指導している結果、全体的に生徒の図書館の利用時間は昨年度と比較して伸びている。しかし、余暇に読書をする習慣を定着させるには、至っていない。 ・優れた講師の話、シャボテンログ・スタンバイの運用を通して、暴力やいじめが許されない環境であることを周知できている。	・ビブリオバトルや百人一首大会などの図書委員会活動をさらに充実させるとともに、芸術鑑賞などで優れた文化に触れる機会も保障し、生徒の知的欲求を高められるように努める。情報を得るための場所、知的好奇心を刺激するための場所として、図書館の存在意義をすべての生徒に認知されるように、生徒とともに知恵を出し合いながら、渾然とした活動に臨まないように工夫を続けていく。	A B					
	教育相談室	・心に悩みを持つ生徒やその保護者が安心して相談できる環境の整備に努める。	・「気づきシート」や係会議による各学年からの情報を集約し、気になる生徒や支援が必要な生徒の情報を的確に把握する。15日以上欠席している生徒は、「気づきシート」へ入力すること、紙に記入する「気づきシート」を活用するなど、新たな情報把握の手段を取り入れる。 ・しゃぼんログの入力状況から生徒の様子について担任等から聞き取りを行い把握する。 ・気になる生徒について、学年会議や学年主任会で定期的に情報共有を行い、必要なアプローチや支援の必要性を見極め、ケース会議の開催やSC,SSW、外部機関と連携できるように努める。 ・思春期相談の開催について、保護者へはメール配信で、生徒へはGoogle Workspaceで周知する。	・月に1回以上、情報共有のための会議を開く。提案された対応策については、担任等に迅速に伝達する。 ・「気づきシート」の新たな活用方法を取り入れる。 ・月に1回以上は、相談室から学年団、生徒課と情報共有を行う。 ・ICTを通して周知することにより、学校自己評価アンケート「悩みを気軽に相談することができる」の肯定的回答を75%以上を維持する。 (R5年度学校自己評価アンケート 生徒78%、保護者76%)	・月に1回、係会議を開催し気づきシートを基に学年ごとに情報共有している。 ・紙に記入する気づきシートは4月当初の職員会議で伝達したがまだ活用がない。 ・Googleクラスルームで教育相談室からSCやSSWの活用、シャボテン(健康観察アプリ)の活用について発信している。 ・7月の学校自己評価アンケート「勉強や人間関係の悩みを気軽に相談することができる」の肯定的回答は生徒81%、保護者75%。生徒の肯定的回答が3ポイント上昇。心育を学校経営目標に位置付け教員全体で意識して取り組んでいる成果かもしれない。保護者は1ポイント減となった。「学校はSC,SSW等悩みを相談できる体制が整っている」の肯定的回答は、生徒89%、保護者87%だった。保護者へ教育相談室の取組やSC,SSWの周知についてもう少し積極的な工夫が必要。	B B B A	・月に1回係会議を開き、各学年の係や保健室からの情報を共有、会議生徒の状況確認と対応策を協議した。学年主任会に参加し、管理職や学年主任とも情報共有を行った。 ・学年フォルダの気づきシートは定着している。 ・本年度より遠隔授業体制の導入をきっかけに、欠席が15日以上の子生徒対象にアセスメントへの作成を新たにに行った。学年主任会やケース会議の資料として提示し、生徒把握の第一歩となっている。 ・思春期相談の開催について、保護者へメール配信を活用し周知した。 ・12月の自己評価アンケート「勉強や人間関係の悩みを気軽に相談することができる」の肯定的回答が7月より2ポイント減少した。新たな質問項目「悩みを相談できる体制が整っている」の肯定的回答は生徒88%、保護者90%で概ね良好な結果だが、肯定的回答90%以上を目指したい。	B B A A	・遠隔授業体制の導入により、欠席日数15日を超えた生徒の情報共有を行う校内体制が整備されたことで、生徒把握の基盤が分かりやすくなった。教職員の利用向上につながっている。気づきシート入力も定着している。 ・学年主任会に相談係も参加し、気になる生徒の情報共有ができた。 ・シャボテンアプリ等の相談ツールの活用を呼びかけているが、教員へ相談することへのハードルはまだ高い。日頃からの声かけを教員から意識して行うことを再確認し、相談ツールの活用について工夫や改善を加えながら根気強く生徒へ発信する必要がある。	・シャボテンが生徒にとっても身近な機能となるよう週に2日は担任がクラス全体へ入力を促す日を設定し、保健委員会を活用した啓発を行う等を行う。 ・生徒の支援体制を全教職員が共通理解できるように委員会や朝礼、学年会議の機会を捉え資料提示を行う。 ・今後も学年主任会を通して、生徒の情報共有を継続していく。	B B					
	普通科	・キャリア教育の推進を通して、各学年の段階に応じ、人生設計の一部としての進路意識を持たせ、生徒一人一人の目標達成のために取り組む力をつけさせる。	・進路指導課・学年・担任・教科と連携し、LHR・CCT・担任面接を通じて進路(学習)への意識を高め、進学を見据えた学習活動の充実に向け働きかける。特に、1年次の文理選択LHRを通して将来を見据え2・3年時にぶれない選択をさせる。 ・学年団・商業科・国際情報課等と連携して必要とする学年に対して普通科集例会を開催する。	・学校自己評価アンケート「進路に関する情報が適切に提供されている」の項目のマイナス評価の割合が5%以下 (R5: 6%)	・今年度初めての試みとして2年団にご協力いただき、2年生普通科集例会を開催した。次年度以降の開催については学年団の考えを尊重しながら探していきたい。 ・学校自己評価アンケート「学校は、進路に関する情報を適切に提供している」の項目のマイナス評価の割合が3%となった。進路指導課及び学年団の取組が評価されている。	B B A	・学校自己評価アンケート「学校は、進路に関する情報を適切に提供している」のプラス評価が95%であり、マイナス評価は5%。	B B	・学校自己評価アンケート「学校は、進路に関する情報を適切に提供している」のプラス評価が95%であり、マイナス評価は5%。 ・進路課及び学年団の取り組みが評価されている。	・2年生対象普通科集例会を開催し、進路意識の向上をはかる。 ・新103年担任で進路に関する情報共有できるようなフォーラムを準備する。 ・CCTと連携し、進路実現への相乗効果を構築していく。	B B					
	国際科	・4技能を意識した授業と生徒が主体的に課題を見つけ学ぶ授業を展開し、留学生との交流会やイングリッシュキャンプなどの行事を通して異文化理解を深めさせる。	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の評価と改善を行う。 ・授業や行事でChromebook等のICTを効果的に活用する。 ・校外でのスピーチコンテストや国際交流行事などへの参加によってアウトプットの場を増やし、英語力を向上させ異文化理解を深めさせる。	・2年生のGTECの4技能トータルスコアの平均CEFR-JがA2-2以上の生徒が9名以上となる。 (R5: 1年生6名) ・行事や授業アンケートにおいて、「ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった。」と回答した生徒の割合が85%以上となる。 (R5: 84%)	・2年生のGTECの4技能トータルスコアの平均CEFR-JがA2-2以上の生徒は12名であった。 ・2年生1学期のアンケートで、「ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった。」と回答した生徒は87%であった。小テストの実施、レポートの提出、Googleスライドを使った発表など、ICTを効果的に取り入れた授業を科目ごとに実施している。11月のイングリッシュキャンプでもChromebookを活用した活動を行う予定である。	A B B	・2年生のGTECの4技能トータルスコアの平均CEFR-JがA2-2以上の生徒は12名であり、目標の9名を上回る結果となった。 ・行事や授業アンケートで、「ICTを活用することで授業(行事)での英語理解が深まった。」と回答した生徒は86.1%であった。 ・初の試みとして、韓国の高校生とのオンライン交流を12月に実施し、国際情報科2年生9名が参加した。英語でのプレゼンテーションやクイズを通じて理解を深めた。	A B B	・GTECの結果が目標を上回ったのは、授業内容や学習環境の整備及び生徒の学習意欲が効果的に機能したためと考えられる。英用英語技能検定などの英語外部検定試験にも、多くの生徒が挑戦している。 ・ICT機器の活用については、機器の活用頻度や質、教師と生徒のICTリテラシーが向上したことが挙げられる。 ・一部の生徒ではあるが、海外の同世代と積極的に交流し、実践的な英語スキルとデジタルリテラシーの向上につながった。	・基礎学力向上に重点を置きながら日々の授業内容を計画し、生徒一人ひとりの理解度に応じたサポートを行う。 また、定期的に個別指導の時間を設け、学習の進捗に応じたアドバイスを行うなどとして、補習授業を充実させる。 ・教員のICTスキルを強化するために、校内研修やワークショップを定期的に実施し、効果的な指導法や成功事例を共有する場を設ける。 ・韓国の高校生とのオンライン国際交流継続に向けて準備を進めているが、学年と学科を超えて、このような機会をさらに増やしていく。	B B					

該当する 授業目標 の 番号	課・学科 学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中 間 期		最 終 期						学校関係者評価				
					達成状況		個別 評価	総合 評価	達成状況		個別 評価	総合 評価	結果の分析		改善のための方策	評価の妥 当性	改善方策の 適切さ
(2)	商業科	・ビジネス活動に関する専門的な学習を深め、関連する検定や資格を取得し、社会貢献できる人材を育てるとともに、新学習指導要領実施の検証及び継続的な取組みを進める。	・地域の人的・物的資源を活用して、ビジネスマナーの向上や国内外の経済事情の把握。金融・金銭教育(租税教育、商品開発を柱として)の充実を図るため、ビジネスマナーや経済事情に関する講演会等の実施(各学年1～2回実施)及び商品販売や校外研修(市場調査)など地域社会貢献活動に積極的に取り組む。 ・新学習指導要領実施に伴う検証と継続的な取組みとして、新科目における教材・教具及び指導法の準備及び研究を進める。デジタル技術を活用した社会課題解決の学習機会を提供し、校内外の活動等において、生徒のデジタル学習における成功体験の機会を提供し、デジタルを活用した探究的な学びを実現する。	・学校自己評価アンケート「社会人としてのマナーやルールといった道徳的意識についての学習の機会がある」の項目に対する肯定的回答が90%を超える。(R5: 80%) ・学校自己評価アンケート「学習活動や特別活動において、課題提示やICT活用等で工夫した学習機会を提供している」の項目に対する肯定的回答が90%を超える。(R5: 91%) ・ICT活用授業については、科内で効果的な指導法について適宜情報共有し、生徒がICTを活用し、互いの考えを交換したり、共有する授業ができる教員が90%を超えている。	・外部講師による講演会として、1、2年生は「ビジネスマナー講演会」(8/20、8/21)、3年生は「キャリア教育講演会」(6/11)を実施した。学校自己評価アンケート「社会人としてのマナーやルールといった道徳的意識についての学習の機会がある」の項目に対する肯定的回答は90%で、取組の成果が見受けられる。 ・課題研究「商品開発」及び「開放講座」講座の生徒が、地域の有識者や団体が主催するセミナー等に参加し、昨年以上の活躍の準備ができていた。 ・学習活動だけでなく、探究活動、進路学習等、あらゆる場面でICTの活用が常態化している。アンケートからも90%の肯定的な意見である。	A	A	・外部講師による講演会として、1、2年生は「ビジネスマナー講演会」(8/20、8/21)、3年生は「キャリア教育講演会」(6/11)を実施した。学校自己評価アンケート「自分は、社会人としてのマナーやルールといった道徳的意識を心掛けている」の項目に対する肯定的回答が97%で、取組みの成果が見られる。また、地域貢献の事業として、課題研究「商品開発・開放講座」の生徒が、地元企業や関係団体と連携し、商品開発販売実習に取り組んだ。 また、小学校への出前講座として、「租税教室」を実施し、高校生が児童に向けて、税の仕組みを授業した。これらの関連行事は、校内では体験できない取り組みであり、各自のキャリア形成に大きく前進した。 ・ICTの活用においては、アンケートの中で「先生はICT活用したり、振り返りシートを活用するなど授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすい。」が、92%の肯定的意見であった。	A	A	・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への満足度は高いと言える。校外での活動取り組みが、生徒自身のキャリア形成に大きく役立っている。今後も継続した取組みをしていきたい。 ・情報教育機器の安定稼働に努めた。運用稼働は順調である。ICTが学習、探求、進路等あらゆる場面で、適切かつ効果的に活用されている。	・地域の人的・物的資源を活用した各種講演会や地域貢献活動への参加は、校内で体制づくりをしっかりしながら進めていく必要がある。 ・情報機器更新など、新たな構想に向けた準備及び運用は、関係機関や事務室等と連携しながら今後も進めていく必要がある。	A	B			
	1年	①家庭学習習慣を定着させ、学習を中心に据えた基本的な生活習慣の定着を図る。その際、chromebook等のICTの効果的な活用を適宜行う。(課題発見力、課題解決力) ②学校行事に主体的に参加し、生徒会活動や部活動等を通して生徒の心身の健全な成長を支援する。(協力する力、自律的活動力) ③CCTにおける進路研究や探究活動、また社会貢献活動等の様々な活動を通して社会性や規範意識を養い、自己肯定感を高めさせる。(自己調整力、発信力)	①授業中心の学習スタイル(予習・授業・復習)を定着させ、週末課題等も活用し、安定した家庭学習時間を確保させる。 ②学校行事・生徒会活動・部活動等への積極的な参加をうながす。 ③オープンキャンパスや学校説明会への参加、CCT等でのchromebookの活用による情報収集・分析を行い、学問や進路についての理解を深め、興味を広げていくとともに、自己の生き方について考えさせる。	①学習実態調査において、一日平均の学習時間が140分以上になっている。(R5: 133分) ②学校自己評価アンケートにおいて、「文武両道をめざした高校生活を送ることができる。」の項目に肯定的に答える生徒の割合が85%以上になっている。(R5: 77.8%) ③学校自己評価アンケートにおいて、「将来の進路や生き方について学習する機会がある」の項目に肯定的に答える生徒の割合が90%以上になっている。(R5: 91.4%)	①学習実態調査での一日平均学習時間は4月が107分、6月が105分となっていて、勉強不足感は否めない。特に、平日の学習時間が少ないので、部活動との兼ね合いや、放課後・家庭での時間の使い方をよく考えさせたい。 ②7月の中間アンケート結果では肯定的な回答が83.8%だった。多くの生徒が学習と部活動の両立を意識して生活している。 2学期は学校行事が増え、1年生の生徒会活動参加者も出てくる。積極的に各種活動への参加をうながしていきたい。 ③7月の中間アンケート結果では肯定的な回答が85.3%だった。 進路志望調査では全科で75%以上の生徒が国公立大学を希望している。 学年集会や通信の発行で進路の意識を高めた。今後もCCTなどで進路につながる活動をさせたい。	B	B	①学習実態調査での一日平均学習時間は4月が107分、6月が105分、10月が81分と徐々に減少した。年間平均は98分だった。 ②最終アンケート結果では肯定的な回答が83.1%だった。7月とほぼ同じ結果となった。 ③最終アンケート結果では肯定的な回答が75.8%だった。7月の結果より約10%減少した。	B	B	①メディア(スマホやゲーム等)に費やしている時間が多い。(スマホ依存傾向の生徒も懸念される)また、周りや他の生徒の状況を見て安心してしまっているのではないかな。 ②勉強と部活動の両立の意識は高いが、①の学習時間に表れているように行動が伴っていない。もしくは、自分の勉強法の確立に至っていない。 ③CCTなどで自分の興味を具体化させる時間を設けているが、それを進路に落とし込むまではもう少し時間が必要。 また、質問にある「生き方」を考えるまではさらに時間を要すると思われる。	①学科、教科等の枠を超えての呼びかけや協力体制、課題の出し方、指示の方法も懸念される)また、居残り学習等も含めて)を工夫する。 ②学年全体としては、1年を通して比較的稳定落ち着いた高校生活を送ることができた。来年度も現在の指導を踏襲しつつ、2年生として学校の中心となる活動やCCTの探究活動等チャレンジさせる。 ③進路については各自の方向性が早く決まるのが理想的だが、よく考えて悩むことも必要である。本人の納得する進路が見つかるよう担任との個人面談や学年集会での各教員からの話を通して伝えていく。	B	B			
	2年	①学校生活への主体的な取り組みを通じて、校内活動の中心学年であるという自覚を促し、規範意識や周囲への思いやりの心を育むように指導する。 ②学校生活の様々な活動の中から、生徒の進路決定に向けての視野を広げ、必要な情報を収集し、自らの進路実現に向けて行動できる力を身につけさせる。	①部活動や秋祭祭等の生徒会活動へ、単に参加だけでなく、自分達自身が企画・立案・運営を行うなど、校内活動へ主体的に取り組むよう促す。 ②CCTにおける探究活動や修学旅行・学校行事・部活動などが将来の進路実現につながる活動であるということ意識させたくうえで活動させる。	①学校自己評価アンケートにおける関連項目の肯定的回答が90%を超えている。 ②学校自己評価アンケートにおける関連項目の肯定的回答が90%を超えている。	①学校自己評価アンケートの「学校の生徒会活動、委員会活動やホームルーム活動は、生徒が積極的に関わり活発である。」の項目の肯定的回答が93.3%。同じく「自分は、学校行事に主体的に参加している。」の項目が81.7%であった。 ②学校自己評価アンケートの「学校は、進路に関する情報を適切に提供している。」の項目の肯定的回答が94.4%であった。学校生活の様々な場面で、中堅学年として中心的な活動ができ、また、進路意識が高まるよう、今後も指導していきたい。	A	A	①学校自己評価アンケートの「学校の生徒会活動委員会活動やホームルーム活動は、生徒が積極的に関わり活発である。」の項目の肯定的回答が87.2%。同じく「自分は、学校行事に主体的に参加している。」の項目が90.1%であった。 ②学校自己評価アンケートの「学校は、進路に関する情報を適切に提供している。」の項目の肯定的回答が90.9%であった。全体的に中間期よりも若干低下した。	A	B	①春・秋の球技大会、秋祭祭と主な学校行事が終わった時期の調査のため、全体として低下傾向にあると考える。 ②2年生の後半になり、入試制度や教科に関する内容など、生徒に提供される進路関係の情報が高度化・複雑化してくる時期であるため、肯定的な回答が減少したと考える。	①学校行事だけでなく生徒会活動や委員会活動なども含めて、年間を通して生徒が積極的に活動を行えるよう、指導していく必要がある。 ②複雑化する入試制度に対応できるように入試制度や入試に向けての見通しを分かりやすく説明する必要がある。合わせて科目選択についても、幅広い進路選択に対応できるように指導していく。 ①②とも具体的な指導場面として、生徒面談・SHR・LHRなどが考えられる。	B	B			
	3年	・教員同士支え合う雰囲気作りを行い、進路指導課と連携することで、生徒の多様な進路希望に応える。	・主体的・対話的かつわかる授業を実施することで学力を向上させ、生徒の視野と進路選択の可能性を拡大する。 ・細やかで丁寧な面談を生徒、保護者に行い、適切な進路情報を提供する。	・学校自己評価アンケート「9教員は授業の進め方等を工夫していて、分かりやすく充実した授業を行っている」に対して全科生徒の肯定的評価が85%以上になっている。(R5: 2年生 74.3%) (R5: 3年生 86.9%) ・学校自己評価アンケート「12進路に関する情報が適切に提供されている」「13進路について、担任や進路指導課の先生が相談にのってくれる」に対して全科生徒の肯定的評価が95%以上になっている。(R5: 2年生 12.91.3% 13:92.5%) (R5: 3学年 12.91.6% 13:95.4%)	・学校自己評価アンケート「9教員は授業の進め方等を工夫していて、分かりやすく充実した授業を行っている」の項目の生徒の肯定的回答は、92% ・学校自己評価アンケート「12進路に関する情報が適切に提供されている」「13進路について、担任や進路指導課の先生が相談にのってくれる」に対しての肯定的評価が96.5%、92.2%となっており、微増・維持している。 引き続き、生徒の様子をよく観察し取組を続けていきたい。	A	B	最終アンケートによると、項目9については91%項目12、13については、それぞれ96%、90%となっており、中間期より若干低下した。引き続き、生徒の様子をよく観察し取組を続けていきたい。	A	B	生徒の状況は、試験(就職・進学)の影響を強く受け、刻々と変化したが、生徒の様子をよく観察し、項目9の取組を継続できた。 12と13の項目については、新課程初年度ということもあり、情報が集めにくかったが進路指導課のサポートと担任の先生方の細かな面談等を通して、何とか対応できたように思う。	これまで通り、生徒の様子をよく観察し、しっかり話をしてタイムリーな情報提供とサポートを続けていく。また、進路指導課と連携をとりながら、進路実現に向けて頑張ることや人間的に成長できることを、生徒と教員が共有できるように継続して取り組んでいく。	B	B			